



又ル病



川崎ゆきお

「最近意欲が弱まりました」

「意欲が湧かないと？」

「意欲は湧きっぱなしなんです、実際行動になると冷めます」

「しかし、意欲はあるのですね」

「大あります。しかし行動が伴わない。さあ始めようとなると、静かになります。沈黙の艦隊です」

「深海魚のように」

「しかし、意欲はあると」

「はい」

「じゃ、それは意欲じゃないのかもしれませんがね」

「はっ？」

「何か目的があって、それに向かう気持ちです。目的が頼りない、または、なければ、意欲だけでは空回りするでしょ。歯車が噛み合っていないか、相手側の歯車がないかです」

「はあ」

「だから、まずは目的を持ちなさい。そのための実行を支えているのが意欲です。意味のある欲ですからね、意欲は」

「はあ」

「分かりましたか？」

「はあ、しかし」

「何ですか」

「意欲だけじゃだめですか」

「ヌルに向かっても仕方がない」

「何を塗るのですかな。恥の上塗りとか」

「何もない。空。無効なものと言うことです。だから意味が無い。あるとすれば無意味と言うことです。また、これは無意味という意味すらもない。要するに空っぽと言うことです。そして、空っぽという空間もない」

「般若心経のようなものですか」

「それは知りませんが、まあ、目的がなければ、処理しようがないでしょ。だから、あなたが動けないのは、処理しようがないためです。だから、あなたの言う意欲というのは、これは別物です」

「毎日意欲的なものになあ」

「何に」

「ああ、何かやろうと」

「何を」

「ななな何かです」

「だから、その何かを先に見付け出して下さい」

「一杯あったような気がしたんだけどねえ」

「その一つ、どんな？」

「あああ、忘れました」

「それはただの妄想というか、思い付きというか、そのレベルでしょ。やはり必要なことではなかったのでしょ」

「でも、意欲に満ちています」

「それは、ただの躁状態です」

「ただの」

「そうです。はしゃいでいるだけなのですよ」

「病気でしょうか」

「元気な病気です。このタイプは何でも病気してしまえるので、あまり心配なせずに」

「あ、はい。しかし、無意味なことでもやってみたいです」

「でも、やる前になると冷めるのでしょ」

「はい、盛り下がります」

「だから、ヌルしか出てこないからです。ヌルしか返さない世界に入っているためですよ」

「ヌルって、ヌルヌルですか」

「何もないので、そういう質感もありません」

「そこって、芸術の極致ではないのですか」

「だから、そちらへ逃げ込む人が多いのです。お病気の一つですがね」

「ヌル病ですか」

「そうです。まあ実際行動になると冷めるのであれば、健全です。だから、あなたは大丈夫です
から」

「はい」

了